論文の内容の要旨

論文題目：近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容
　　―“音楽すること”の人類学的研究 ―
氏　　名：田森雅一

本論文は、南アジアを代表する北インド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）の社会組織であるガラーナー*gharānā* とその集団概念の変化に焦点をあてつつ、近代インドにおいて“音楽すること”、すなわち音楽で生きる人々の日常的実践とその社会空間を探求しようとする人類学的試みである。日常的実践とは、個人的経験と社会的相互作用のなかで構成されるすべての人間的営みであり、社会空間は日常的実践が遂行される場とその歴史的広がりを意味する。そして、そのような“音楽すること”の人類学的研究において明らかにすべきは、現代のインドに生きる音楽家たちの再帰的なアイデンティティ化の過程であり、ガラーナーという概念を用いて“われわれ”を語る音楽家の主体的行為とその歴史的背景、個人や集団の意識が形成される土台となった社会関係の構築とその変化のあり方である。

序論では、“音楽すること”にまつわる音楽家の日常的実践と社会空間を考察するにあたり、アラン・メリアムの「音楽の再生産モデル」[Merriam1964]を再評価しつつ、アンソニー・ギデンズの「社会の再生産モデル」[Giddens1979]を援用してリモデリングを試みる。すなわち、概念に基づく音楽行動の結果としての楽音が、概念それ自体を再生産あるいは変化させるという「音楽の再生産モデル」の一方向的な循環的図式を、音楽形成の歴史、共同体における社会関係、音楽家の主体的行為という異なる水準の相互作用として捉えなおすために、ギデンズが社会的再生産を論じる際に設定した３つの時間性（制度の再生産、人間の再生産、相互行為の再生産）を分析的視点として導入する。音楽も社会も時間の流れのなかで再生産される他はないが、その流れは重層的であり、構造と行為は相互に規定しつつ変化を生み出していく。このような時間性の導入により、構造の現れとしての制度が維持ないし変化する歴史的過程、共同体における学習過程と社会関係が結び合う過程、そして人々の相互行為が織りなす実践的過程という、マクロとメゾとミクロの各レベルでのガラーナーの検討と同時に、それらの社会過程がいかに関連し合って社会空間を構成しているかという重層的関係性についての考察が可能になる。

本編では、マクロ・レベルはヒンドゥスターニー音楽とガラーナーの歴史を宗教・政治・経済・教育などの制度の維持あるいは変化との結びつきに、メゾ・レベルは系譜関係・婚姻関係・師弟関係・パトロン＝クライアント関係などによって生産・再生産されるガラーナーの社会関係に、ミクロ・レベルは音楽家が語り、学習し、教え、演奏するという主体的行為とその相互作用に対応するものとして位置づけ、以下のような三部構成をとって論を進め、それぞれの問題について

検討している。

第Ⅰ部：ガラーナーとは何か
第Ⅱ部：近代におけるインド音楽の社会空間
第Ⅲ部：サロードのガラーナーのガラーナーをめぐって

第Ⅰ部は、第１章から第６章までの全６章からなり、“ガラーナーとは何か”という問題について多角的に検討している。その目的は、ガラーナーという概念と実態を明確にしつつ、音楽家がガラーナーという用語・概念を用いて“われわれ”を語ることで何を得、何に抵抗しているのか、立場や諸属性、状況等によって異なるその語り口の戦略性と、それらの言説が生まれる歴史的背景との接合のされ方を考察することにある。

第１章では、ガラーナーに関する複数の言説や物語を参照すると同時に、日本の家元制度との比較を行いつつ、ガラーナーの定義と適用範囲を明確にしている。

第２章では、ガラーナーの成員性について、社会的成員性と音楽的成員性という二つの分析的視点から議論している。前者は生物学的あるいは儀礼的な親子関係を通して獲得されるものであり、後者はガラーナーの音楽スタイルを構成する実践知の学習によって獲得されるものである。そして、ガラーナーの成員性については、何が（音楽性の問題）、誰に（社会性の問題）、どのように（学習の問題）、伝承されてきたかという視点が有効になることを示し、音楽性の問題については“秘伝”となる音楽財産の内容について、また、社会性の問題については系譜関係、婚姻関係、師弟関係という３つの水準の社会関係の関連性について明らかにしている。

第３章は、音楽家の認識的視点から、彼らの社会音楽的カテゴリーについて検討することが主眼である。ガラーナーによって“われわれ”と“彼ら”を語る行為について分析し、「カースト」と結びつく社会音楽的カテゴリーが、世襲音楽家のアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしていることを明らかにする。そして、そのような“われわれ”の語りが前近代（ムガル帝国期）から植民地近代（英領インド帝国期）に至るガラーナー形成の歴史とどのような接合関係を有しているのかを、第４章から第６章で検討を行う。

第４章ではガラーナーが形成される以前の音楽家（楽師）の社会音楽的カテゴリー、すなわちガラーナーの母体となったと考えられる４つのカテゴリー（カラーワント、カッワール、ダーディー、ミーラースィー）に注目し、主として前３者の社会歴史的考察を行っている。そこでは、ムガル帝国の中央宮廷に集められた多様な音楽集団の中からセーニヤーという音楽的権威が形成されてゆくプロセスを整理し、古代に遡るヒンドゥーの古典音楽がなぜムスリムに継承され今日に至っているか、イスラーム宮廷における改宗の問題などを中心に議論がなされている。

第５章は、ラージャスターンを中心とする地方宮廷における王室と楽師たちの雇用関係（パトロン＝クライアント関係）について検討し、ムガルの中央宮廷から移動してきたセーニヤーを中心とする大伝統的な宮廷楽師と、地元の伴奏者や踊り子など小伝統的な芸能者のカテゴリーとの差異と相互作用についての考察が主眼である。本章では、ムガル帝国の衰退とともに中央宮廷に集められた楽師たちの地方宮廷への分散と定住がガラーナー形成の契機となったことを検証している。

第６章では、都市に居住する宮廷楽師の子孫たちが、ガラーナーという用語・概念を用いて“われわれ”を語るようになった近代の背景を、英領インド帝国の国勢調査におけるカースト統計と分類、そして反ナウチ（舞踊＝売春）運動などとの関連から検討している。そして、植民地政府

により行われた国勢調査や民族誌において多様な社会集団に属する音楽家が、4つ目の楽師のカテゴリーであるミーラースィー＝ドームという一つの「カースト」に“結晶化”され、社会改革運動の潮流の中でナウチの幇助者として扱われるに至った経緯と、そのようなカテゴリー化に抗するアイデンティティ構築のあり方について議論している。

第Ⅱ部は、第７章から第９章までの全３章となっており、“近代におけるインド音楽の社会空間”と題し、第Ⅰ部のガラーナーの社会歴史的背景と、第Ⅲ部の事例研究を結びつける役割を担っている。より具体的には、20 世紀に入って加速されたインド音楽とガラーナーの近代化およびその帰結としての今日の音楽家の社会空間について明らかにすることを目的としている。英領インド帝国下のガラーナー形成期から独立運動を経てポスト形成期に至る 20 世紀前半、ナショナリズム全盛のこの時代になされた宮廷音楽の国民音楽化と、その過程で行われた北インド古典音楽の理論化、全国的音楽会議での論争、学校教育におけるカリキュラム化（暗黙知の形式知化）、そしてマスメディアの発達による音楽家たちの社会経済的基盤の変化などを事例として取り上げ考察を加えている。

第７章では、旧来的な藩王・領主制が終わりを告げ、音楽家のパトロン＝聴衆が王侯・貴族から地方領主へ、そして都市の富裕層から一般知識人へと拡大する流れのなかで、宮廷音楽の国民音楽化に奔走した３人の音楽改革者の活動に注目しつつ、彼らの活動がインド音楽とガラーナーの近代化に与えた影響力について検討している。

第８章では、20 世紀に入ってのレコード産業、映画産業、そしてラジオ放送の発展について概観し、その中でも音楽家の日常生活とガラーナーのあり方に最も大きな変化を与えたと考えられる全インド・ラジオ放送 All India Radio(AIR)の展開とそのインパクトについて検討している。そして、AIR が音楽の新しいパトロンとなり、古典音楽の大衆化に寄与しただけでなく、音楽家の演奏態度や生活習慣、また音楽表現そのものにも変化を与えたことを示した。

第９章では、第７章と第８章で検討した学校教育やマスメディアの発達などによってもたらされたインド音楽とガラーナーの近代化の今日的帰結を、定量分析と定性調査による把握を試みている。音楽家の属性に関する統計分析（定量的把握）と、サロード・ガラーナーに関連する音楽家の言説分析（定性的把握）を行うことで、現代の音楽状況の一端をマクロな社会空間およびミクロな日常的実践の両視点から考察している。

第Ⅲ部は、第 10 章から第 14 章までの全５章からなる、弦楽器サロードのガラーナーについての事例研究である。第 10 章はサロード・ガラーナーの歴史と系譜に、第 11 章は婚姻関係と師弟関係を中心とするガラーナーの社会関係に、第 12 章はガラーナーの学習過程に、第 13 章はアイデンティティをめぐるポリティクスに、第 14 章は新しいガラーナーの可能性と音楽の再生産に関わる音楽家個人の創造性の問題を扱い、具体的な事例を基に検討を加えている。

第 10 章では、今日まで存続する４つのサロード・ガラーナーの系譜関係を整理し、サロードという弦楽器がインドに持ち込まれ、改良・発明された経緯と、その楽器演奏に特化したサローディヤーがどのようにして誕生したのか、その出自や権威の所在について、それぞれのガラーナーに属する音楽家の口頭伝承や歴史資料に基づいて検討している。

第 11 章では、前章で取り上げた４つのガラーナーのうち、パターン人起源を主張する二つのガラーナーの婚姻関係と師弟関係との相関について分析している。その目的は、家族・親族を中心とする親密性の高い関係性の中で音楽財産がどのように伝承されてきたのか、また「婚姻連帯」としてのガラーナーがどのような広がりと外縁を有するのか、そしてそのような婚姻連帯が英領インド帝国期から独立後のポスト植民地期にかけての歴史の中でどのように変化してきたのか、

という問題群を検討することにある。これらの分析によって、婚姻関係と師弟関係の結びつきが音楽財産の分与･伝承と実践共同体としてのガラーナーの再生産に重要な役割を果たしていたことが明らかにされる。

第 12 章では、師弟関係とその連鎖からなる実践共同体としてのガラーナーに焦点を当て、音楽的実践知の学習過程と音楽家のアイデンティティ化についてよりミクロな視点から検討している。サロードにおける音楽的実践知の学習が道具（楽器）を通しての暗黙知の身体化プロセスであり、師匠との「わざ言語」を介してなされる知的協働作業であることを明らかにし、師弟関係の連鎖の中で蓄積され学習される音楽的実践知の歴史性と音楽家のアイデンティティ化という、マクロな時間軸とミクロな時間軸の接点について探求している。

第 13 章では、自らのガラーナーに言及するサローディヤーの語りの政治性に注目する。前章では師弟関係という実践共同体内部における学習プロセスに焦点を当てているのに対して、本章においては実践共同体外部に対する音楽家の言説を検討の対象としている。今日、音楽的・社会経済的に成功した音楽家は、さまざまな機会の語りを通して自らのガラーナーの過去と現在をどのように再構成しようとしているのか。一方、過去の栄光に対し、今日においては決して成功しているとは言えないガラーナーの子孫たちは、そのような言説をどのように受け止め評価しているのか。“われわれ”と“彼ら”の伝統（過去）に対する現在の語り口から、その政治性と再帰的なアイデンティティ化のあり方について考察している。

第 14 章では、系譜関係、婚姻関係、そして師弟関係という３つの次元からなる社会システムとしてのガラーナーの変容が生み出した、“新しいガラーナー”の可能性について探求している。第Ⅱ部で検討したインド音楽とガラーナーの近代化、すなわち音楽スタイルの根底にある音楽財産のオープン化が音楽家の日常的実践に与えたインパクトを再検討しつつ、そこから生まれた“新しいガラーナー”が第Ⅰ部で検討したガラーナーの定義と適応範囲の変更を迫るものなのかを検討する。そして、音楽スタイルの変化に対する音楽家の語りから伝統的システムと個人的創造性との関係について考察を加えている。

結論においては、「音楽の再生産モデル」を音楽形成の歴史、共同体における社会関係、音楽家の主体的行為という異なる水準・時間軸の相互作用として捉えるために、「社会の再生産モデル（３つの時間性）」を援用して第Ⅰ部から第Ⅲ部までの議論をまとめ、近代インドにおいて“音楽すること”とはいかなることなのかを述べている。

Merriam, Alan P. 1964 *The Anthropology of Music*. Chicago: Northwestern University.
Anthony Giddens 1979 *Central Problem in Social Theory*. Berkeley: University of California.